八ッ場ダム住民訴訟通信-144
2019 年 4 月 25 日発行

水問題の現場から…

昨年 12 月、水道法が改正され民営化への道筋がつけられました。そして本年 4 月、これまでのフルプラン＝「需要主導型の水源開発」に変わる「リスク管理型の水の安定供給」なる新たな水源開発基本計画が、吉野川で実施するとの閣議決定がなされました。施設の老朽化や大災害からの大断水のリスクを避けるとの趣旨ですが、一方で「極端な気候変動による危機的な渇水に備える」ともしています。前者はうなづけるものの、後者は果てしなく水源開発を続ける危険をはらんだものといえます。

私たちの「命の水」、その大転換がなされようとしている時、田中清子さんの存在が浮かびました。田中さんは、八ッ場ダムをストップさせる東京の会の会員として共に八ッ場ダム裁判で闘ったいわば“戦友”ですが、墨田区でうまれた「雨水市民の会」の中核メンバーとして雨水利用を牽引してきた方です。雨水を「天の恵み」とする理念と、生活の場にいかす暮らし方を記していただきました。必読です。

雨水の循環を考える

田中清子（八ッ場あしたの会運営委員）

日本は国土の７５％を山が占め、そこから流れ出した川が海に注ぎ、水蒸気が雨になって地上に降り注ぐ「雨水の循環」で成り立っています。近年、都市化が進みこの雨水循環システムが断ち切られてしまった結果、都市災害発生の大きな要因になっています。都市の農地は宅地化によって減少し、道路はアスファルトで覆われコンクリートジャングルとなり降った雨は地下に浸透せず、そのまま下水道に排出されています。その結果、内水氾濫が起き、都市災害が頻発するようになりました。地下に巨大な貯水槽を建設する土木対策がとられていますが、異常気象による集中豪雨に対処するには、抜本的解決策になっていません。

水が貯まらない思川開発(南摩ダム)に導水する大芦川

都市が直面する課題は河川への流出抑制だけでなく、本来の雨水循環システムがはたす機能として、生態系回復、地下水や湧水の保全、ヒートアイランド化の防止などへの側面を重視し「水循環を保全し、育むこと」が大事なのではないでしょうか。

「雨水市民の会」は１９９５年、雨を下水道に捨ててしまっている都市構造に疑問を持ち、雨を活かし、空や大地にかえしていこうという目的を掲げる市民によって墨田区を拠点として生まれました。まちの中に小さなダム(雨水タンク)を持つことによって自前の水源を確保すること、遠くのダムに依存して水を浪費することに慣れてしまった私たちの暮らしを見直す活動を始めました。

墨田区は木造家屋が密集し、道路も狭いため火災が起きても消防車が入れません。市民の要望により、雨水タンクの設置、町角に「路地尊」という雨水井戸を造ることに取り組みました。防災対策として重視した墨田区は助成制度をスタートさせました。

私たちは、雨水タンクに雨を貯めてみると、こんなにたまるものかと驚く一方、大気汚染が身近な関心事となりました。本来蒸留水のはずの雨が、黒い雨となっている原因が改めて自動車社会に起因していること、また食料輸入大国としての日本は、雨水輸入大国でもあることにも気づかされました。食料生産には大量の雨が必要です。将来世界食料戦争が起きたら、日本の立場は厳しい局面にさらされるのではないでしょうか。

私たちは世界各地に雨水利用の調査に出かけ、わずかな雨で必死に生きている人たちの暮らし方に接しました。イランで砂漠化を防ぐために緑化に取り組み、カナート(水路)の命の水で生活している村人たち、黄土高原の土の家「ヤオトン」で地中に貯水槽を作って生活している人たち、灌漑用水を使用できない小作農の人たちは、雨水タンクで動物を飼い、細々と作物を栽培していたブラジルの部落 etc、雨水に恵まれながら雨を捨て、一方で食料として雨水を収奪している私たちの矛盾に気づかされたことです。

一方、雨水利用先進国のドイツでは、多くのことを学びました。ドイツで雨水利用が普及したきっかけは、高い水道料金の節約思考だったそうです。その後下水道に流入する雨水の流量を抑制することによって、下水道の負担を緩和する目的が加わったのです。こうした取り組みによって、建物の敷地と大気に雨水を浸透・蒸散させるための様々な工夫が急増したことを知りました。ベルリン市では集合住宅の地下室に雨水槽を設置し、沈殿・濾過した水を中水としてトイレの洗浄水として利用している事例を多数見学しました。また屋上緑化や壁面緑化の面積が広がり、街路樹とともに緑の多い都市空間となっています。団地の芝生の中にはマンホールを設置し、地下浸透を図っている街づくりは、本当に目からうろこの感がありました。

ドイツは国がスローガン止まりにしておくのではなく、健全な雨水循環を回復することが急務であることを、各自治体での施策づくりに積極的に後押ししている姿勢が明確になっています。

ひるがえって雨に恵まれた日本はどうでしょうか。旧建設省は、総合治水という視点を１９８０年代に打ち出し、雨水の浸透や貯留のための流出抑制施設を作ることにより、都市洪水を防ごうとしてきました。けれども流域の大部分を占める建物敷地に対する雨水流水抑制に関する法は、まだありません。個人宅で浸透・貯留施設を設置しても、治水効果は残念ながら公的にカウントはされていません。

ちなみに、我が家では駐車場の下に２トンの貯水槽を設置して、トイレの洗浄水に利

用しています。渇水が続き雨水槽が空っぽになれば水道水に切り換えるシステムになっているので、水道料金の節約には確実になっています。但し下水道料金は支払っていないのも事実です。もっぱら個人的趣味のレベルに過ぎません。

けれども２０１４年、雨水利用推進法が成立しているのですから、日本でも前向きに進んでいくことを期待したいです。これまで、全国にあるドーム施設やサッカー競技場では雨水利用が進められています。サッカー場の芝生の散水には大量の水が必要ですから、雨水利用で水道料金の削減になるでしょう。オリンピックを控えての新国立競技場でも導入されているのは素晴らしいことです。

東京２３区中１２区で雨水利用の助成金制度も始まっています。多摩地区でも小金井市は雨水枡に助成金を設け、地下浸透に積極的な取り組みを行っているのは有名です。各地でこうした制度が今後一層導入されることでしょう。**※左の写真は田中家の雨水利用トイレ**

私たちは水道のコックをひねれば水が出て、その水が安全である生活があたりまえになっています。けれども水が永久に、無尽蔵にあると思っている人は３・１１を体験した日本人には誰もいないでしょう。

改めて雨水循環を回復し、保全していく知恵を私たちが自分のこととして考えていく時期にきているのではないでしょうか。

番外のお知らせで失礼します。

日韓を東アジアの“火薬庫”にしていいのか。

日韓の罵りあいが続く。たがいに正義を標榜しているだけに始末が悪い。でも、このままで良いわけがない。なぜ、韓国の人々は非難し続けるのだろうか…。現在の日韓関係には、いろいろ言いたい人も少なからずいると思う。でも、私たちは余りにも朝鮮半島の歴史を知らない。先ず韓国の歴史を知ることから始めよう。韓国の人々の心の内を知ろう。

講演会

「朝鮮半島の歴史と現在 ―政治文化の視点から」

講師：趙景達(チョ・ギョンダル)さん　千葉大学文学部教授

日時：5 月 19 日(日)午前 9 時 30 分

場所：取手市福祉会館小ホール

資料代：500 円　　主催：取手革新懇　　お問い合わせ：090-4527-7768 神原

八ッ場ダムをストップさせる茨城の会　代表：濱田篤信　船津寛

事務局：神原禮二　〒302-0023 取手市白山 1-8-5　携帯：090-4527-7768